三河アララギ

平成二十四年

六　月　号

第五十九巻　第六号

ニューヨーク日記(68)

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

March 29, 2012 : Mega Millions

Blue Shoe Diaries

宝くじだよ！初めて買ったの。NYでは今回皆買ってたよ！なんたって賞金$640millionって史上最大！ShoeLadyとどうにか販売機で適当に買ったら後ろに並んでる人達も初めてで私たちが教えてあげるはめに☺　でも凄いお金だよね～仕事やめてデカイ家買う？何するんだろう？飛行機とかプライベートジェットに乗れるね～

We played the lottery for the first time! Very exciting. It's an insane $640 million jackpot!! Largest ever so far. What would you do with all that money? Quit your job and buy a big house? Flying private would be really nice…
Apparently, there were lots of first time buyers like us. When we went to buy it, the people behind us were first timers too that somehow we ended up showing them how to buy the lottery ☺ Now I'm off to go dream about what I'll do when I'm rich! Good night!!

目次

第五十九巻第六号（通巻七〇二号）

表紙　ユリノキ
ニューヨーク日記（68）　今泉　由利（1）
感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」　Blue Shoe（2）
歌集「一本の木」　杉浦　弘（4）
風草　岡本八千代（5）
スーパームーン　今泉　由利（6）
祭り囃子　弓谷　久子（7）
山里なれば　青木　玉枝（8）
開花宣言　内藤　志げ（9）
御礼肥　佐藤　喜仙（10）
「責任」　安藤　和代（11）
水仙の花　林　伊佐子（12）
蘇鉄の種　胃甲　節子（13）
春風　伊藤　忠男（14）
夫の歌碑　金津　文枝（15）
胡麻和え　半田うめ子（16）
津波　伊与田広子（17）
新緑　清澤　範子（18）
卯月へ　近藤　映子（19）
母の信条　北川　宏廸（20）
覚書帳　杉浦恵美子（21）
白山吹　平松　裕子（22）
桜を守る　小野可南子（23）
佐奈川堤　山口千恵子（24）
九十九里　夏目　勝弘（25）
ペンペン草　阿部　淑子（26）
利久梅　富岡　和子（27）
海よりの風　白井　信昭（28）
現代学生百人一首　東洋大学（29）
ことよせ　いーはとぶ（30）
私の一首　弓谷　久子（31）
安藤　和代（32）
半田うめ子（33）
伊藤　忠男（34）
植村　公女（35）
一石（36）
喜仙（37）
晧一（38）
俳句　佐藤　喜仙（39）
大橋　望彦（40）
今泉　雅勝（41）
一石（42）
鮫島　満（43）
夏目　勝弘（44）
岡本八千代（45）
今泉　由利（46）
平松　温子（47）
贈呈誌　四月号（48）
和歌から派生した季語の本意（その二十三）
ある自然科学者の手記（1）
絹の話（19）
物理学者と詩歌の世界（29）
短歌に詠まれた茂吉
山の辺の道への思い（3）
「氷魚」のことから（137）
ことのはスケッチ（402）
和菓子街道（68）
お知らせ・編集後記・三河アララギ規定

感　銘　歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」

ノボタンの花のむらさき咲き散りて君がへにあるごとき夏の日

P 198

月の夜となりて虫鳴く生きも死にもひとたびのみの経験にして

P 199

歌集「一本の木」

杉浦　弘

輝きて微塵ただよふ階段を午後の授業にわが昇りゆく

散乱の心を持てるいくたりを罵りて午後の授業終へたり

まなこつむり時の長さに耐へをりし眠られぬ夜の暁となる

風草

蒲郡　岡本八千代

窓開ければ風草しづかにそよぎをりその風入りくる夏の初風

風草のあるか無きかのその花穂群がりそよぐも楽しかりけり

保育園に今日より預けらる曾孫のいよよはじまる一歳の心

曽祖母の生き方なんてものは無し春夏秋冬をただそのままよ

夕暮れて少し歩まむと歩みゆく稲生の海への春の小路（こみち）を

浜辺にて会ひて忽ち別れたりまたわれひとり夕ぐれの路

歳月はつひに百年の啄木忌四月十三日もはや陽が沈む

くれなゐの薔薇の芽のびて何糎子規も思はでしばらくここに

遥かにも白くかすめる高知城描きあげし夫のカルトン画の中

糸柳桜の花の染めつきの手拭かむる姉さんかむりに

スーパームーン

東京　今泉由利

夜の空のしし座のししの胸あたり赤く大きく火星の光り
金星と木星火星土星をも一望にしてプラネタリウム
人間と同じ粒子になりたつと金星光る明るく光る
今日の夜の三・五齢の月の上金星はあり下に木星
一日の全部の時間の終る頃見上げてゐたりスーパームーン
少しづつ私の窓に近づきて小さくなりたりスーパームーン
暮れなずむ空のおぼろの空色を移し終へたりスケッチブックに
小庭辺のやまもも雄花の花盛り隣の雌木は昨日伐採
こんもりと３Ｄの藤の花スケッチブックの平面に描き
生息をせし記録とて藤の花ひと花ひと花幾房を描き

祭り囃子

豊川　弓谷　久子

春雨とは似ても似つかず荒れ狂う春の嵐の一日となりぬ
朝刊を待ちゐて小さき名をさがす教職員の異動の欄に
永い眼で見て下さいと言はれたる三十年を思ひてゐたり
各駅の停車も楽し駅ごとに眺むる桜も又さまざまに
我が胸に誇リ残れり御津磯夫門下生として学びし日々よ
含めるように教へ給ひき先生は歌のこころを歌のしらべを
三河アララギ三十五年の我の跡四十年を目指してゆかむ
雨の中祭り囃子の鉦太鼓子供等の曳く山車が行くらし
鳴り響く花火の音もくぐもりて雨の一日の祭リ終りぬ
竹藪の葉づれの中の我が生家故郷偲ぶはらからを憶ふ

山里なれば

新城　青木　玉枝

列島のどのチャンネルも原子力発電のニュース日本のひと日
径の辺に黄の色映ゆる蒲公英（たんぽぽ）の連なりて咲く山里なれば
鶯の鳴く声清し古城跡の小径に暫し足をとどめて
見知らざる人にも会釈してすぐる山里過疎に住める村人
わが庭にも花桃のしだれの盛りなり朝なみつめつ初めての花
春雨も冷えびえ伝わるこの部屋の火燵（こたつ）のぬくもりウトウトとして
玄関の花器にさしたる水仙に春の薄日のさしこむ午后は
伊丹を出でこの山里に三ヶ月悔いも悲しみも日びうすれゆく
週一度虹の里へのデイサービス同じ世代の元気をもらふ
さらさらと流れゆく音水の音水路も春の歌声となり

開花宣言

豊川　内藤　志げ

東名の高速道の土手の桜(はな)わが町上野の開花宣言
万作に辛夷(こぶし)桜と高速道路土手の一角花に埋るる
藪中の洩れ陽の中の一花の浦島草を見て立ち止まる
麓より立ちゐる煙の白しろし高く高くと東の空に
一筋の煙に向ひ蕪採りに冷えし朝なり卯月初の日
豊橋の市場の近くの喫茶店雨降る朝夫を誘ひぬ
下り道足に見つけし筍を唐鍬持ちに急ぎ帰りぬ
三ヶ日のみかんの山の山の背に萌黄筋なし鮮やかに映ゆ
わが藪の竹の空につばくらめ今年は何故に燕が多い
蝶が舞ひ雀が遊ぶ畑の径厚手のヤッケ脱ぎて休みぬ

御礼肥

東京　佐藤喜仙

例年では遅きと思ふ梅の郷総じて見れば三分の咲きなり
梅林の花は今だに三分咲き脇の臘梅咲き残りをり
桜木にショートホールは囲まれてハッシと打てば球は花に消ゆ
たらちねの母我が胸に眠られて花の散りかかる墓石のしづか
東京の唯一の村檜原村渓流釣りに通ひし若き日
福島の桃は風評被害にて売るに売れずも御礼肥施す
まそかがみ清らに流るる谷川に山女ねらひでひねもす遊ぶ
ひさかたの朝けの微光身にあびて浜辺歩めば海は友なり
さねさしの相模の海の波静か長谷の寺より眼下に広ごる
石走る日光竜頭の滝滾り命の果てし紅葉散り落つ

「責　任」

豊川　安藤和代

そよぐ風流るる水面の輝きも春思わせて心も軽し

教職をめざす孫ゆえ尚更に夢忘るるな「責任」の二字

少しづつ吾の手離れゆく孫なれどそれが淋しくそれが嬉しく

バランスを見事に孫の一輪車髪なびかせて菜の花の道

黒雲は東へ東へ流れゆき晴れゆく空よ明日春祭り

春祭り嫁の作りし稲荷寿司の旨きを思ひて寿司飯を炊く

豌豆の白き花見ゆ菜園を吹き抜ける風緑の香り

雪柳風にさらさらふわふわり雪かと紛ふ一瞬の過ぐ

桜の枝に染めたスカーフなびかせてさっそうと行く春風の街

風さやか木下にあえか夢二の絵の女思わせて貝母の咲けり

水仙の花

岡崎　林伊佐子

そこらくに群れて咲きゐる水仙の香りただよふ庭の草取り

この年は四月になりても寒き里おそき収穫椎茸をとる

離れたる椎茸小屋に行き来して西に移ろふ星座を仰ぐ

夕点る灯もなき里に吾が家の目印の如く明るき電灯

戸車のレールを走る高き音雨戸を開けて日の出みて立つ

夜明けして椎茸焙ることもなれ目覚めし夫が吾を労(ねぎら)ふ

二階より見渡す村の廃屋に桜しろじろ咲き継ぎてをり

消炭を使ひて朝餉の魚焼く昔のままの山家の生活

朝早く目覚めし窓に新聞を配るバイクが瞬間てらす

烏避(よ)けの銀色テープを畑に張りぴらぴらと照る四月の風に

蘇鉄の種

豊橋　胃甲節子

春嵐猛り狂へる雨風は列島くまなく駈け抜けてゆく
鶯は知りてか知らずか其の音をば彼く喜びて聴きゐる吾れと
五十余年相逢ふ事も無きままに電話の声は変らぬ従妹よ
雉鳩のまろまろまろき愛らしさ小走りに木々の間を駈け行きぬ
沖縄の旅の土産に添へらるる一粒蘇鉄の種を埋めたり
芽を出だす蘇鉄の生命楽しみて日々眺むるに丁度良き位置
裏庭の花びら数多余りにも美しき花びら惜しみて掃かず
故郷の竹の子甘く柔らかし届きたる味沁じみ味はふ
以心伝心妹の体を案じをり其の時電話のベルは妹より
高知の友は虎杖を惣菜に好む故送ってあげたい採れない高さ

春風

大阪　伊藤忠男

野は緑ゼンマイ土筆ふきのとう今はスーパー棚にある春
西風に青空霞む黄砂にもシルクロードの影を追うなり
東京のスカイツリーから見下ろせば霞ヶ関も揺れに揺れたり
弥生去り卯月は花の新学期心浄めむ青空の下
診察の扉の前で待つ時間春風吹くも不安拭えず
薬増えなにが何かも分からずにただ忘れぬと分けて箱入れ
クローバー四つ葉探してこの先に何があるのか古稀過ぎし身に
春風に蓮華たんぽぽ菜の花に囲まれ暮らす日のあることを
葉音さえ謎めきている黒竹の群落もとめ山に分け入る
熊野路は昔も今も旅人を酔わすミカンの花かぐわしき

夫の歌碑

島根　金津文枝

大山のペンション村は未だ雪深く軒下にあまた固め積みあり
春雪の大山袴ぐ飛行雲感激しをり素晴らしき景色
丸山橋を過ぎ道端は残雪続く雪は黒く埃を被れる
辨當に桜の花散り来るも御飯と共に一緒に食ぶる
夫の歌碑に足とめて読む人あり三ヶ月公園桜満開
ひる山（せん）の野焼黒々広ごる草原大山の残雪美し
写真の整理すれば夫の従姉妹宝塚合格の写真が出て来る
外人の手を連ぎもらう人のあり朝の人通り無き参道をジョギンクす
湖東大教会前道路南京櫨の太く大きく並木の続く
高速の反対車線のトラックのすべて大型道巾ほどの

胡麻和え

新城　半田うめ子

胡麻和えを食みたく吾は前畑のパセリをつむよさわやかなりし
警察の人であるらし今日も又吾が室の前長く居りたり
農薬の激しき菊の葉を好み義理の妹病みてしまひし
西川の川辺を行く今日も又二羽のむく鳥むつまじく舞ふ
庭中に小でまりの花真白したれ下りつつ風にゆれをり
万病に効くと聞きし十薬を今朝もせんじて独り飲みをり
さわやかに朝風の吹く鳩一羽何をつひばむ田の中に居り
浜名湖のうなぎの白焼き鶴見（つる）にて味のよくして時々食みき
浜名湖の鶴見（つる）の鰻美味くして十年前は毎週行きたり

津　波

豊橋　伊与田広子

津波は渥美半島廻りたりて三河湾へと入り来ると云ふ
わが前の中学校は海抜の七メートルと説明のあり
わが家を建てし建築会社より東北地震の報告のあり
逃ぐるより二階に上がれば良きならむ海より十キロ程度あらむ
狭き家片づくる事急務なり廊下を片づけ物置かぬなり
ミサイルの飛んで来たかと思ふ程大き音して雷一発
居間よりの見ゆる大空晴れたるに北の空は黒雲覆はる
鶯の鳴き声聞きて春来たる実感ありたりわが心に
寒さにて閉ざされたりしわが家は鶯鳴き声聞へなきかな
寒き後夏の如きの暑さなり毛糸のセーター脱ぎて暮らしぬ

新緑

春日井　清澤範子

堤防の桜を見むと夫と歩く南の枝は開花間近し

低気圧今夜は強く吹きつけて春の嵐は軒先たたく

喫茶店に娘を待ちて憩ひをり夫の腰痛日毎治りつつ

家族三人（みたり）桜の元にシート広げ散る花びらに寝そべりて見る

広げたる弁当の上にはらはらとそよ風に乗り桜花散る

山茶花を取り櫟（いちい）に替へし吾が庭の垣根に新緑の色増し来り

職場にていじめに合ひて泣く娘吾も哀しく泣く今夜は

娘泣けば吾も悲しく泣けてくる吾は励ます笑顔を見せて

娘の心強くなれよと笑顔にて娘の肩をやさしくさするも

卯月へ

名古屋　近藤映子

本堂のがらんと広い西明寺親に連れられ子等とつれだち
わが夫を見舞ひて冷たき手足を擦る二時間すぐに過ぎゆく
弥生末例年よりも低気温桜はまだ〳〵かたき蕾よ
卯月七日も過ぎて行く見降す桜木白く咲きをり
八分咲きいや満開か問ひながら見降す桜は白し
わが夫の手足を擦り温めぬ桜が咲いたと語り聞かせぬ
二、三日夫の顔を見なければ就寝間際にしきり気になる
夫見舞ひ冷たき冷たき手足擦りつつ共にテレビ見る一時を
わが夫の冷き手足擦る時今安心の私の一時
われも又年取り居り足腰の痛みの有れど夫見舞ふ

母の信条

東京　北川宏廸

臘梅（ろうばい）の黄が山茱萸（さんしゅゆ）に引き継がれ連翹（れんぎょう）の黄本当の春

東山の石畳の墓道の傍らに水の音あればなお

人の字は二人の人が凭れ合う背負う重さは同じではない

巖（いわお）を噛む蟋蟀（こおろぎ）のような貌（かお）をしてわれは読みたり「吉本隆明」

読みつつも分ったようで分らない吉本のいう『共同幻想論』

頑として座らぬ杖の人がいて譲りたる席は空席のまま

言わないと伝わらないが言ったとて無駄かも知れぬと思う寂しさ

よく頑張ったと一言云って欲しかった思っていても云わぬわが母

きのうきょうあすあさってしあさって念ずれは通ずが母の信条

まず人はセシウムの基準値超えたる野兎のこと心配すべし

覚書帳

蒲郡　杉浦恵美子

この頃は取り出す頻度減りにけり夫の遺しし覚書帳
我が夫が我に遺しし覚書得意料理のレシピも幾つか
去年までは毎朝通ひしこの路を今朝逆向きに辿りけるかも
春日山裏手の丘に独り佇つこんな場所から三ヶ根見ゆる
時鳥鶯交互に鳴く声の聞こゆる里に棲みけり今年
気の晴れぬ夫に花見と御津山に連れて来たのは去年の今頃
こんなこと思ひ出しても詮無きに不憫な場面が次々浮かぶ
ああ我は泣くため不憫な思ひ出を殊更選んで浸って居るのか
日に何度夫を思ひて鬱ぎ居るその間にもはや葉桜となる
悲しみを共有できる機会なら行ってみようかホスピス家族会

白山吹

豊川　平松　裕子

我と姪と見守る中に声も立てず眼も開けず母は逝きたり

今思へば素直に母を好きと言へぬ我は冷たき娘と思ふ

タンポポの綿毛ひとつが入りて来て膝に止まれり朝の我が店

旅箪笥の上に置かれし天目茶碗母の供養の茶頭の手前

床の間の白山吹きの一輪を母と見立てて茶を供へたり

けいこ中に時折に見る床の花母の顔重（かんばせ）なりて見ゆ

今日よりは我が母の花と強く思ふ白山吹の清楚なる白

我の呼ぶ声にひと度も応へずして母は逝きたり寂しからずや

吊しあるパジャマに母の顔も手も足も見えをりそこにゐますか

目の前に母の姿の見えてをり眼閉ぢても見ゆる眼差し

桜を守る

豊川　小野可南子

穴観音を守りめぐらす桜木のやうやう枝さき淡く紅ざす
猪に掘られし土のそこここに桜を守る小さき唐辛子
散り初めの花ビラのもと師の君と寿恵先生とそしてあなたと
花片の厚く積れるその上を児のラジコンカーはスリップスリップ
花吹雪ツバメの飛翔のこの道は接骨院への我が朝の道
狭庭辺の緑の中に枝ひろぐ猩猩楓のこの春もみじ
大鍋をほとほとほと火のストーヴに終日（ひねもす）苺のかほり満ちつつ
アスファルトにくっきり私の影うつる春の光の際だつ今日は
一足ごと左に傾（かし）ぐ我が影よ七十歳を二つ越えたり
今は亡きあなたの歩みをふと思ふ私の影も左に傾ぐ

佐奈川堤

豊川　山口千恵子

表示する数字25のデジタル秤り八十円の切手貼りたり
しっかりと門の扉の閉められてこの家の主も犬も姿見ず
うす暗き祠の奥におはします穴観音さまを屈みて覗く
うすみどり目立たぬ花の貝母百合寒の戻りの風に吹かるる
開き始む白木蓮の花びらの千切れて飛べる一片二片
花終れる水仙の葉群を抜き出でて貝母百合伸ぶ蕾もちつつ
右岸を行き左岸を帰り八キロの佐奈川堤の桜ウオーキング
うしろ向きに親子の猿の三匹の座りてをりぬガラスの檻に
長き尾を体に巻きつけ寝そべりて少し目開きぬワオキツネザル
房長くひらきはじめし藤の花ハナアブめぐる羽音のたかし

九十九里

豊川　夏目　勝弘

指すべらせ携帯あやつるが多くして上総一ノ宮への車中にをりぬ
故里の九十九里にたびたびに安らぎ求めし左千夫し思ふ
打ち寄する波は渚の砂に消ゆ消えゆく音を聞くも再び
海神（わたつみ）の沖より寄する今日の波恐れおののく波にはあらず
師を越ゆること出来ざると歎げかひし文明の一首忘れられざり
久方の空をうめゐる今日の雲太平洋の小さく狭ましも
海風の冷たく吹きつく砂丘の蔭にしばし佇み歩みを止む
波消しに砕け飛び散る波もあり渚に消ゆる波もあるなり
引きゆきし波はたちまち寄する波左千夫めぐらす九十九里浜
九十九里の遥けき沖に近海に往き交ふ船影みることのなし

ペンペン草

横浜　阿部淑子

被災地のテレビ画面の痛ましく食することも忘れてゐたり
ここあそこ地震の続く日々にして大地鎮まれひたすら祈る
祝いごと見舞法事とつづきつつ年金暮しに叶はぬことの
あれは何夫は足止む杖の先ぶるぶるゆるるペンペン草よ
アスファルトのわずかなすきに芽生えこし春知りて咲く野草いとほし

利久梅

東京　富岡和子

花は散りみどりひき立つ赤い茎古希過ぐわれの靴音かるい
シマ柄のチューリップが並びゐる赤白黄色はるかとなりぬ
やっと春白木蓮（はくもくれん）は白（しろ）く咲き紫木蓮（しもくれん）は紫（むらさき）に咲く
にしき木の芽吹くみどりに走り寄る神の手業のその精密さ
雨にあい雫してゐる真綿色その名知られぬ利休梅（りきゅうばい）

海よりの風

豊川　白井信昭

御津海岸を今に伝へる御野立所跡高き石塔は海に向きをり
堤防の御野立所跡の記念樹は染井吉野と三河黒松
からからと音高くして鯉幟海よりの風に平たく泳ぐ

現代学生百人一首　東洋大学

苦労すると言われて辞める夢じゃない俺のこの手で畑を拓く
北海道帯広農業高等学校三年　大森　拓

トラブルも悩みも不安も失敗もリセットしたいゲームのように
岩手県立水沢商業高等学校二年　菊地祐奈

グラグラと揺れる大地に一人きり遠く離れた母から電話
専修大学北上高等学校三年　石井聖人

実習で僅かに感じるミリの誤差悪戦苦闘の鉄鋼削り
山形県立酒田工業高等学校二年　梅津侑弥

『ことよせ』

（西浦公民館　いーはとぶ）

「芽は上よ」と凡そ三十糎隔てつつ種薯ジャガを幼なと植ゑをり　牧原正枝

雨ふりの珈琲にほへるカフェーに集ひてわれらけふの吟行会　岩瀬信子

たくましき若き介護士はわが姉のリハビリの歩みに調子合はせり　石田文子

浅蜊採りより帰りたるわが夫は冷たき磯の空気をつれきぬ　山﨑俊子

この夕べ菜の花黄（きい）のほのあかり思ひゐしかなしみうすれゆきつつ　三田美奈子

診察を終へたる母と院内の喫茶にて飲む温きこのミルクティー　稲吉友江

この襖開けたればわが仲間たち四十年ぶりか今宵あなたとも　鈴木美耶子

届きたる嫁の手紙に心はずむ窓には弥生の雪が舞ひ舞ふ　吉見幸子

私の一首

あるがまま受け入れ今年も生き継がむ初日を待ちて縁先に佇つ

弓谷久子

年毎の一月元旦縁側に佇って初日を待つ、初参りの自動車が黒いシルエットとなって走る跨線橋の彼方山の稜線にたなびく雲を赤く染めて初日の光がさして来る。

年に一度だけ敬虔な心になって今年の抱負等を考えて見る。八十路半ばとなった今年はもうあるがままに生きようと心に決めた。

世の中なるようにしかならない、残年はあとどれだけか、あるがままに。自然のままに。

祖母の里はしぐれているや本宮山とっぷり雲におおわれてをり

安藤和代

病弱だった母に代って私は祖母に育てられました。昔の事ゆえひとりっ子だった私は安藤家の跡継ぎだからと厳しく育てられました。折々祖母は本宮山を見ながら「あの本宮様のむこうからお嫁に来てね」となつかしそうに眺めていました。ですから今も母より祖母との思い出が深く残っています。晴れば又曇ればそれなりに本宮山を見る時祖母が実家を思った心情が思い出されるのです。〝ばあちゃん実家は甥の孫がしっかり守っていますよ〟

西川の川辺に咲きつつ少しづつ散りて行くなり野菊の花は

半田うめ子

健康の為（ため）と思いつつ吾が家の裏の川辺を歩くのです。雑草の多い中の小さい花が少しずつ散って行く自然の世界を知らされた思いがしました。

メール打つ指先凍りままならず何度押せども文字定まらず

伊藤忠男

昔は手紙で意志を伝えていたものが、電話の普及で言葉のみの伝達になり、最近は、携帯メールが多く使われている。その時勢に乗り遅れまいと、私も多用している。電車の中からでも、思い立つたらすぐ連絡できる。大変簡単で便利である。

しかし、長文の携帯メールを作成すると、指先の疲れか打ち間違いが多い。特に「おこそとのほも」などは手前や行き過ぎてから、「確定」を押し、やり直しの連続だ。それが、この寒さ、指先がかじかんでいる時はなおさらである。隣の文字ボタンを押したり、時にはクリアーや送信ボタンに指がかかり「しまった」と思っても後の祭り、初めから打ち直す羽目になったり、謝りのメールをも打たなければならなくなる。寒い日の電車の中、なかなか思うようにいかず、メール文が完成せぬまま駅に着いてしまった。

「俳句」

小さき手の祈りのいくつ花辛夷　植村公女

花連翹こんがらがって風抜けり

立話続いてをりぬつくづくし

麦秋の香りの中の散歩かな　一石

理科といふ心で観るや初夏の山

戦ひは五月なりしと太平記

黙祷で済むことでなし涅槃西風

十万羽の雁空に十兆の星

帰路に見る我家のかたの春の虹

喜仙

火が風を呼びてまた火の野焼きかな

老桜こぶに幾花咲きにけり

花ニラやアルゼンチンの生れとぞ

皓一

贈呈誌　四月号

「秋田アララギ」

桜木の落葉を掃ける媼あり文豪の墓を問へばみちびく　佐々木　操

鉢に咲く赤きプリムラと冬越さむ気負ひも今はなくなりしかな　大野　瞳

「秋楡」

一朝の霜にしおれし君子蘭泣く程悔いても忘れし手入れ　江畠美代

薄桃の蕾いっぱい身にまといブルーベリーは春を待ちたり　伊藤典子

「愛媛アララギ」

寒牡丹は夕日より赤く咲いていて露の雫も染まって落ちる　大前隆宣

葉の落ちしナンバンハゼの白き実を雪かと思ひじっと見上ぐる　河上　幸

「鹿児島アララギ」

つぼみを食ふ鵯の来るなきこの春は木蓮の花ここにも眩し　蓑部巌夫

年古りしアコウは太く枝張りて気根伸び居り岩場の上に　森枝むつ美

「滋賀アララギ」

プランターに種まき育つサニーレタス雪降る日々の食卓かざる　星居洋子

風雨去りアスナロの枯葉散り敷きて夕べ掃き寄す庭の乾きて　岡田慶子

「高知アララギ」

庭を占むる古木の楓紅葉散れば鳩の巣造り露はに見ゆる　前田　和

ほのぼのと干大根は香りをりこんなひとつに満たされてゐる　森本節子

「冬雷」

大杉に両の手の平押し当てて願い事する三峰神社に　斉藤トミ子

塀寄りに雪凍りいて危うきに足止め梅の莟を仰ぐ　田中祐子

「柊」

麦の芽を牛に踏ませる昼さがり肥沃な大地に緑広ごる　塩見　瞳

屋根下に雪に逃れし寒菊を供花のためにその一本を切る　吉田恵美子

「桎の木」

久々に訪ひ来しいとこのプレゼント冬バラの黄色暖かく見ゆ　吉田令子

箒目の清しきみ寺の庭に立つ牡丹の冬芽小さく尖れり　末次泰子

「群山」

花芽もつ垣根近くの石楠花も朝夕掻き寄する雪に埋もれぬ　千葉利二

南天の木立を埋めて堆き雪は書斎の窓にせまりぬ　大山文穂

「穂の原」

久々のひばりの声を背なに受け遅くなりたるじゃが芋植うる　田中浄子

「かさね」

公園の池の清掃春浅し　田島昭久

人生の給油の時間日向ぼこ　小林美登里

和歌から派生した季語の本意（その二十三）

「かさね」「笹」　佐藤喜仙

64　五月闇

「五月やみくらはし山のほとゝぎすおぼつかなくも鳴きわたるかな」
藤原実方（拾遺集）

「さつきやみ花たちばなにふく風はたが里までか匂ひゆくらん」
良暹法師（詞花集）

五月雨の降る頃の空が曇りがちで、又陰鬱と感じられる時、昼なお暗い事を言い、あるいは月の出ぬ闇夜のことと、この両方に詠まれている。

例句

おしあうて蛙啼くなり五月闇　蓼太
はら〳〵と椎の雫や五月闇　鬼城
かすかにも顔明りある五月闇　花蓑

65　菖蒲（あやめ・あやめ草・軒あやめ）

「白玉を包みて遣らば菖蒲草花橘に合へも貫くがね」
大伴家持（万葉集）

「時鳥鳴くや五月のあやめ草あやめも知らぬ恋もするかな」
詠人知らず（古今集）

菖蒲は単語の節句の「尚武」に通じるところから、当日菖蒲湯にしたり、蓬と共に軒に葺いたりする。古くから「あやめ」とか「あやめ草」と呼ばれたが、菖蒲はサトイモ科の多年草であり、アヤメ科の渓蓀や花菖蒲と混同されやすいので注意せねばならぬ。

例句

あやめ草足にむすばん草鞋の緒　芭蕉
校倉をめぐる古江の菖蒲かな　椎花
いねてより菖蒲の匂ひ思ひ出す　綾子

66　蟬（蟬時雨・初蟬・蟬涼し・蟬捕り）

「石走る滝もとどろに鳴く蟬の声をし聞けば京師し思ほゆ」
大石蓑麿（万葉集）

「蟬の声聞けばかなしや夏衣うすくや人のならむと思へば」
紀友則（古今集）

盛夏ともなれば、いっせいに鳴く蟬の声は驟雨のごとき趣きから蟬時雨と言う。だがそのにぎやかさよりは、むしろ地上で約一週間位の命であるということから、哀れさを詠まれることが多い。蜩と法師蟬は秋の季語である。

例句

閑さや岩にしみ入る蟬の声　芭蕉
蟬涼し足らぬねむりをねむりつぐ　秋櫻子
おいてきし子ほどに遠き蟬のあり　汀女

ある自然科学者の手記（1）

大橋望彦

筆者紹介「理学修士。医学博士。マックファードル癌研究員。東京都専門参事。奥多摩町身近な町づくり推進委員。奥多摩に「悦鹿」工房を構える木彫家。…多数。

「DNA鑑定雑感」①

工房が寒く、何かこのところ風邪気味なのか彫刻に身が入らず、居間でストーブに当たりながらぼんやりとテレビの事件もののドラマを観ていた。その時、犯人の指紋を鑑定する場面があった。それを観ていて、フト感じたことから、この雑感が生まれてきたのである。

ヒトの指紋が個々のヒトで全て異なっているのは何故なのか?こんな単純な疑問が頭を過った。

それと同時に、最近では、DNA診断とか、DNA鑑定とか、やたらとDNAという言葉が聴かれるようになってきたが、これも、個人識別とか、特定の病気を選別する方法として急速に発展した分析技術に拠るからで、非常に微量な検体からでも正確に判断できる方法が確立したためである。ちなみにDNAの断片を比較しながらその異同を調べる方法にDNAフィンガープリント（DNA指紋鑑定法）という言葉が使われている。確かに、個々のヒトのもつDNAが全て異なっており、個体識別に便利なのは理解できるが、これにはどうしてこのようなことだ成立するのかは不明な点が沢山ある。

そもそも、進化とか、遺伝という概念の基礎として染色体があり、遺伝子があるが、其の中の重要な役割を果たしているもにDNAという物質が存在する。このDNAが何故重要なのかというと、其の遺伝情報がすべてこのDNA分子の構造の中に組み込まれており、その情報発現が微妙に調整されているので、生命現象が全て左右されているからである。しかも、其の遺伝情報機関が極めて正確に保たれることにより生物の種の保全、進化の安定性が保たれているのであることは、いまや一般的な常識となっている。ただ、この安定性はどの様に保たれているのか、ということは余り知られていない。

遺伝情報の保存には、DNAの構造、就中DNAの塩基配列順序が基本と成っている。専門的に言えば、その構成している塩基（4種類ある）の配列が3個の塩基の種類を単位として一つの情報を提供している。これはその情報が生体の中で重要な役割を果たしている蛋白質の構造の基本単位であるアミノ酸の種類を決定しており、且つ、その蛋白質が合成される量を規制する役割までしているのである。その塩基配列順序が、この世の中に核酸が出来た時から極めて安定な形で保たれたからこそ、進化が徐々に進みもしたし、種属が比較的安定に保たれて来たのである。この生物の種を決めているのがDNAであり、蛙の子はカエルであり、トンビは決して鷹を生むことが出来ないのもDNAの構造が安定に保たれているからである。しかし、地球の創世期にあってはそれほど安定ではなく、進化は当然速く進行した筈であり、また、

絶滅した種も数多くあった。

この安定性を保つための機構は、極めて大事なことに、生物の基本構造単位となっている細胞が分裂増殖する際に、必ず先行して生ずる現象としてＤＮＡの複製があり、すなわち細胞内のＤＮＡが正確に倍加する必要があるのである。しかも、単にＤＮＡが量的に倍になるということはなく、質的に、全く同質のＤＮＡが複製されなくては成らない。この同質という意味は、先ほどの塩基配列順序が全く同一のＤＮＡが作られるという意味なのである。このＤＮＡの複製にはＤＮＡポリメラーゼというＤＮＡ合成酵素が働いて行なわれている。従って塩基配列順序が全く同一なＤＮＡを作り出すためには、このＤＮＡポリメラーゼが如何に忠実にその塩基配列を読み取って、新しいＤＮＡを正確に作るかということになる。

事実、このＤＮＡポリメラーゼの忠実性に関しては、老人研においてほぼ20年間に亙って研究してきたことから、その忠実なことはまざまざと知る機会となったが、驚異に価するものであった。しかし、その中で、忠実性を狂わせる幾つかの要因のあることもわかった。いわば、その現象は世に言う突然変異に相当する現象に繋がっている。即ち、塩基配列順序の異なる（例え一つの塩基が違っても）ＤＮＡを作ると言うことは、それ以降の細胞は異なったＤＮＡを子孫にそのまま伝えることとなるからである。この典型的な例として、「分子病」という言葉を創出した米国のポーリング博士が見つけた鎌状赤血球の貧血病がそれである。赤血球を作る骨髄の中で、そのＤＮＡを合成している最中に、たった一つの塩基が突然変異（ワン・ポイント・ミューテーション）を起こし、その変化した部分が、赤血球の中にある血色素（ヘモグロビン）蛋白質のたった一つのアミノ酸が別のアミノ酸の種類に変わってしまう。そのため、その変化したヘモグロビンをもつ赤血球の形が鎌状になってしまい、結果としてその赤血球が酸素を運ぶ能力を失ってしまうのである。そして変化したＤＮＡは骨髄で次々に鎌状赤血球を作り続け、血液中にある赤血球はこの鎌状赤血球に満ちてきて、貧血症という病気になってしまうのである。これが最初に見付かったＤＮＡ分子の変化に起因する疾病であった。

さて、ＤＮＡの情報は確かに厳密に伝えられているからこそ、種の安定、個体の維持が保たれているのだが、それでも、自然界には「絶対」ということが中々なく、たまには異常をきたす事もある。これは突然異変の頻度にも表れることだが、ＤＮＡポリメラーゼの忠実性でも、約10万分の1程度の頻度では、不忠実な複製をしてしまうことが判った。従って、こういうことがあるので「進化」は進むのであろう。そうは言っても、10万分の1の頻度で進化が進んだのでは大変である。たいていの突然異変が生じてしまった細胞は、その大部分は生きることに都合が悪い状態となって死滅してしまう。即ち、致死変異なのである。そこでもし生き残ってしまった細胞（例えば、遺伝子情報の発現が直接生死に関係の無い部分、後述、の変化している細胞）がいると、変異株細胞（先ほどの鎌状赤血球のような細胞）とか、癌細胞とかになったり、或いは老化細胞となってしまうであろう。（つづく）

絹の話 (19)

「アトリエトレビ」今　泉　雅　勝

絹と洗濯

絹の衣料品は5千年此の方水で洗ってきました。昭和30年頃までは水洗いして板にはったり、伸子針を打って干している風景をよくみました。ところが今日絹の衣料品には洗濯表示にドライクリーニングの記載が義務づけられるようになり水洗いする人は殆どいなくなりました。なぜ絹衣料品にドライクリーニングを義務付けたのか理由はよく分かりません。以前は街の洗濯屋さんの石油系が主流でしたが、昨今はフッソ系の洗剤を使う事が一般になり、より安価な取次店に出す人が増えました。その結果洗濯物を引き取り後苦情が絶えません。白地が黄変してしまった(最も多い)、毛羽立つた、縮んだ、小ジワがよった、張りがなくなった、艶が失せた、など様々です。高額で購入し一般の物より高い料金を払って洗濯に出したのに、気に入らない仕上がりなので、絹はもう購入しないと云う人が後を絶ちません。ドライクリーニングが絹離れを促進する結果となっています。このように拗れた人に絹の美しさや健康に良い事など説いてもなかなか翻意してくれません。しからば自分で水洗いを勧めると、そんな恐ろしい事は出来ないと言う人が60％位で、洗濯屋の技術が悪い、表示がいけない等、とどのつまり愛情がないのです。

絹は非常に繊細な繊維です、化学洗剤と機械でゴロゴロ大量に仕上げる事に向いていません。洗濯業界は製法で様々に変化する絹に無頓着でいてはいけません、それぞれの絹の性質を研究し直し、新たな絹のドライクリーニング方法を研究開発してもらわなければ困ります。

絹のストールやブラウスなどは自分で水洗いして下さい。奇麗になります、5千年此の方水で洗って来たのですから。「よくぬるま湯で」と云われますが、その温度を言う人はいません、42℃以上になると、絹糸の表面に付いているセリシンというニカワ質が溶け出します、(精練と言って、セリシンをどれだけ取り除くかが絹糸の性質を左右します。シャリ

カンを残したり、ツルツルにしたり、艶を出したり、用途に応じて絹を練って行くのです。）その結果製品にハリが無くなったり、ひどくするとフワフワの綿状になります。絹を洗う最適の温度は20℃～30℃が良いのです。この温度は繭に守られた蛹が快適に過ごせる温度です。

洗い方は手で押し洗いをして下さい。絹糸は２本の繊維がセリシンで覆われて出来ています、特に野蚕絹は家蚕の様に一定の速度で８の字状に休み無く糸を吐き続けません、時々方角を変えて糸を吐くので、肉眼では判りませんが竹の様に糸に節ができます、揉み洗いや高温で洗うと二本に分かれたり、節が裂けて枝毛が起き易くなります。

洗濯後あまり強く絞らないで下さい。乾いたタオルで挟んで水を切る位が適当です。洗濯機の脱水は強すぎて絞りジワが残ります、脱水乾燥では稲藁の様になりアイロンしてもシワがとれなくなります。

干し上がったら（家蚕絹は直射日光下で黄変を早めますので日陰干、野蚕絹はタンニンが含まれているので直射日光でも大丈夫です、但し緑色糸の天蚕（野蚕）だけは緑色が失せないよう暗所干。生乾きの内にと云う人がいますが、絹は綿の２倍～３倍の早さで乾くので、生乾きのタイミングは有りません。）絹は１４０℃迄大丈夫ですので、スチームアイロンを中か高温で蒸気を出しながら休まずかけて下さい、生地の上でアイロンを休ませてはいけません。霧吹きでアオロンは水滴が大き過ぎて水ジミが起こります。

通常のストールやブラウス等は当て布など要りません、地の目に沿ってプレスをすれば素晴らしい艶が蘇ります。

摘み洗い（部分洗い）はそこだけ水ジミになりますので全体を洗って下さい。水ジミも全体を洗えば殆ど解消します。アイロン時のちょっとした水ジミは良く絞ったタオルでその部分から同心円状に少し湿らせてアイロンすると消えます。アオロンジワも同様です。

文字で書くと面倒くさそうですが、綿にアイロンするより楽です。絹は汚れにくいので洗濯は綿の ⅓ 位でよいので省エネです。

物理学者と詩歌の世界（29）

一石

スティーヴン・ワインバーグ

スティーヴン・ワインバーグ（Steven Weinberg、1933―）は米国の物理学者。素粒子物理学や宇宙物理学などの分野で優れた業績を挙げている。ニューヨークにユダヤ人の家庭に生まれた。コーネル大学を卒業（1954）、その後、コペンハーゲンのニールス・ボーア研究所で研究。1年間の滞在後、プリンストン大学で物理学の博士号を取得（1957）。MIT客員教授（1967）、ハーバード大学教授（1973）、テキサス大学オースティン校教授（1982）を歴任（参考文献1）。

主な業績に、パキスタン出身のアブドゥス・サラムと独立に、自然界の4つの力のうち、「電磁気力」と「弱い力」が統一できることを理論的に明らかにしたことが挙げられる。このワインバーグ＝サラム理論（注1）の提唱でサラムと、また同様な研究で成果を挙げたシェルドン・グラショー（注2）とともにノーベル物理学賞を受賞（1979）。そのときの受賞理由は、電磁気力と弱い力を1つのゲージ理論で統一的に記述する理論への貢献、特に中性カレント存在の予想による（注1）。この中性カレントやワインバーグ＝サラム理論によるウイークボゾンの予言などはその後実験で確かめられている。その他の受賞にロバート・オッペンハイマー賞（1973）、アメリカ国家科学賞（1991）などがある。

一般読者向けに書いた著作には『究極理論への夢　自然界の最終法則を求めて』（1994）、『宇宙創成　はじめの三分間』（1997）など。また専門家向けには『場の量子論』（原著：〝The Quantum Theory of Fields〟）などがある。

ワインバーグによるいくつかの言葉を挙げる。

○「人間原理を無用とするものにできなければ我々は科学において敗北するのだ」（参考文献3）「人間原理」については注3を参照。

○「宇宙とは 理解を深めれば深めるほど 無意味に見えるものだ」（参考文献4）

○米国議会での有名な質疑応答：

議員「素粒子物理学のような純粋科学に膨大な国費を使うことが、米国の安全と防衛にどのように役立つかお答え頂きたい」

ワインバーグ：「米国を守るに値する国とする」（参考文献5）

現代の最も尊敬され影響力ある物理学者の1人であるワインバーグには一連の「宗教批判」に連なる論説がある。これをめぐって宗教家や哲学者などによる批判・反論が展開されている。少し長くなるが以下に引用する。（参考文献6）

○「Without God」と題された2008年のハーバード大学講演から。

「科学の世界観は以下のようなものだ。自然の中に置かれ

た我々の生命に何の意味も見出せず、我々の道徳原理のいかなる客観的根拠も、アナクシマンドロスやプラトンからエマソンに至る、道徳法則と我々の考えたものと自然法則の間の、いかなる調和関係もそこには見出すことができない。我々が最も大切にする感情である妻や夫や子供に対する愛すら、我々の脳の中の化学的プロセスによって可能になるのであり、その過程自身、数百万年にわたって自然選択が偶然の変異に対して働きかけた結果生じたものと言える。しかしそれでも、我々はニヒリズムに陥ったり感情を押し殺すべきではない。ぎりぎりのところで我々は、一方は希望的観測、もう一方は絶望の、きわどいナイフの刃の上に生きているのだ。」

○［宗教と科学の］対立の根源は、もともと宗教というものが、雷、地震、病気といった何らかの神的存在の介入を要求するように思われる神秘的な現象の観察から、その力の多くを得ているという事実に発する。（中略）しかし時がたつにつれて、ますます多くのこうした神秘が純粋に自然的な過程として説明されるようになった。もちろん自然界についてあれやこれやを説明したからといって、宗教的信仰を排除することはできない。しかしもし人々が、神秘的現象の全体について他に説明が不可能に思えるために神を信じ、それが年月を経て、これらの神秘が次々に自然主義的に解決していったのだとすれば、信仰はある程度まで弱まっていくものと期待できる。

注１：ワインバーグ＝サラム理論の特徴は、かつて（ビッグバンから１０―１０秒後）は光子とウィークボソンが区別できなかったとしていることである。この状態では宇宙は約１０００兆Ｋもの高温であり、電磁気力が弱い力と区別できず、「電弱力」として力の統一状態にあったと考えられる。

注２：シェルドン・グラショウの功績は、量子電磁力学と弱い力を統一する枠組みを与えたことにある（１９６１）。これを、南部陽一郎の自発的対称性の破れ（参考文献２）を使い、洗練させたのがワインバーグ＝サラム理論。

注３：宇宙の存在は人間のような知的生命の認識にかかっており、もし宇宙に知的生命がなかったとすると、その宇宙の存在は認識されないのだから、存在しないも同然であると主張する。この「我思う、ゆえに宇宙は存在する」という主張は、「強い人間原理」と言われるもの。

参考文献

1）フリー百科事典『ウィキペディア（Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ）』
2）三河アララギ、ｐ40、第59巻、第５号（２０１２）
3）グレッグ・イーガン、「万物理論（原題　Ｄｉｓｔｒｅｓｓ、１９９５）」（山岸真　訳・ハヤカワ文庫ＳＦ）
4）http://learn-english-in-the-world-ted.blogspot.jp/2012/01/blog-post_2497.html
5）http://www-utap.phys.s.u-tokyo.ac.jp/~suto/myresearch/zengaku-semi06_anthropic.pdf
6）http://www.dcsociety.org/id/ninngenn_genri/072.htm

短歌に詠まれた茂吉—あるいは茂吉を詠んだ歌人—

「月虹」　鮫島　満

二、中村憲吉　2

憲吉は、大正十年、渡欧を前に信州富士見で静養中の茂吉を訪問したときのことを次のように詠んでいる。

天づたふ星に近けれ高原にこもりて君がこころ凝りなむ
遠ぐにへ別るる秋を妹背来て花野にこもる人のしづけさ
惜みつつ別るる我れら君がたのむ君がいのちを見に来りけり
国高くはやく冷たし秋に入りて別るる君に会ひに来れり
国たかき信濃の空にしたしみて君に会ふことは我れの幸なり
大正十年（しがらみ）

三首目に「我れら」とあるのは詞書に、「上京の帰途を、たまたま百穂画伯と行を共にし、之れ（筆者注＝静養中の茂吉のこと）を訪ふを得たり。赤彦君また約に従つて諏訪より来り会し、その他アララギ同人多く会す」とある、平福百穂、赤彦、アララギ会員を指す。茂吉は百穂宛の手紙に、「三十一日は憲吉君も来るらしく富士見にて歌会あり、御来遊何卒願上候」と書いている。

憲吉は代表歌集となる『しがらみ』の編集後記に「『しがらみ』を編む気になつたのは大正十一年のことである。前年秋独逸に留学する斎藤茂吉君は神戸で別れ際に、予に早く『しがらみ』を纏めるやうにくれぐれすすめて発つて往つた」と茂吉に感謝している。

焼あとは草野と荒れし君がいへに五年ぶりなる一棟建ちぬ
昭和四年『軽雷集以後』
小夜ふけを行きて浴みぬ焼あとの荒草はらにのこる湯の室

大正十三年十二月に全焼した青山脳病院、童馬山房と呼ばれていた茂吉宅の焼け跡を訪ねた「童馬山房即事」二首である。この日のことを茂吉は日記に、「中村憲吉君ヲ心待ニ待チ居レドモナカナカ来ラズ終ニ午ニ至ル」（昭和四年七月八日）と書いている。茂吉は留学先のドイツから、関東大震災後の生活や金策などのために、憲吉に手紙で相談していた。「東京より手紙まゐり、生命無事なれども病院の損害のことかきあり。帰朝しては奈何と有之候。そこで小生、百穂、赤彦、大兄の三人に御願いたして、短冊会の如きをおこして、千円だけ御援助願上げたく、手紙出し候次第に候が、国家多事の際ゆゑ、この企、到底不可能とも存じ、考へ直し候ことも有

之候が、いかなるものに御座候や、御意見を率直に御しらせ下されたく願上候。」（大正十二年十一月六日付）がそれである。草原となった焼け跡に残っている風呂に入るという歌は結城哀草果にもある。

旅ごころ静（ママ）になりぬ片ゐなか明日香の岡に友とやどりて　昭和五年　同右

かかはりの多きいく年や忘れはてて旅のひと夜を友とをしみぬ

くつろぎて君と起きふす昨日今日わが歓びをしづかにたもつ

たづさふる友を見て思ふうつそみは肝むかふ君とわれとのこれる

「飛鳥」と題する一連のうち前三首には、「八月十日、斎藤茂吉森川汀川両君同行飛鳥の岡に宿る」と詞書がある。二首目の「かかはりの多きいく年」というのは、関東大震災や茂吉の身辺に起きたこと、赤彦や千樫が亡くなったことなどを指しているのだろう。四首目には「岡寺門前の旅籠屋はかつて故赤彦君と泊りしところ」と詞書がある。アララギを支えてきた赤彦も（千樫も）もう鬼籍に入り現実に生き残ったのは茂吉と自分だけだという意味である。かく歌う憲吉もこの八年後に四十五歳の若さで世を去る、

大建物ふるきは焼けてまた建たず先師もきたりよく会ひし家　昭和六年　同右

塀のうちの焼けあと古りぬいくばくを畑になほして君住みつける

題は「童馬山房」、詞書に「一月十六日童馬山房に宿り午後の睡をとる」とある。このころ東京府松原村（現世田谷区）に青山脳病院を復興して青山の焼け跡に分院として診療所を設けていた。一首目は「先師」（左千夫）もよく来た家だったと偲んでいるのである。

憲吉は、昭和七年に肺結核にかかり広島の五日市町古浜に転地療養し、茂吉の見舞いを受ける。

病みこやす友とあひつつなつかしき思（おもひ）ぞたぎつ夕ぐれにけり　『白桃』昭和七年

床のうへに胡座をかきてものをいふ君にむかへば吾はうれしも

友のこと心におもひ寝つかれず幾時か聞く海どりのこゑ

みまかりし師のこと友のことのこりたる遺族のことに関はる

右は茂吉のそのときの歌である。

山の辺の道への思い（3）

夏目勝弘

大君の三笠の山の黄葉（もみぢば）は今日の時雨に散りか過ぎなむ
（八－一五五四）大伴家持

万葉集には三笠の山の歌は十六首、四季それぞれの風物、特に月を詠み込んだ歌が多い。

三河アララギにも、日常の生活のなかの自然を素材にした歌が多い、人の思いに時代の変化はあまり関係ないようである。

そんなことを思いつつ白毫寺と思われる方に歩みを進めると、三叉路に出た。真中に白毫寺とあり、方向が示されていないので、左に行く。現代的な住宅地で行き止り、次は右にすると墓原に出た、寺らしい建物がないので墓参りの人に聞く、山の方を指差してくれた。

墓地を抜け右に曲ると坂道に出る、前方に高い石段が見えた。立ち止り大きく息をする。ようやく白毫寺に到着できた。

石段の下で帽子を取り、汗を拭く少し休みながら石段を見上げる、中程の踊場に紅葉した一本の丈高い草が、いやに目に付く。

石段を上り紅葉した西洋ヤマゴボウの横を通り山門に「ここより有料」の札、入場料を払いつつ右手を見る、老夫婦が木を見上げて何か話している、立札に五色椿の文字。

かの椿かの思いも、トイレはどこかと当りを見回す。用をすませ、ゆっくりと見回す老夫婦と我れのみのようである。

花の寺と言われる白毫寺も静寂そのもの、なんとなく落ち付く思いがした。

萩は冬枯れに黄葉（もみぢば）も霜枯れ状態、本堂に向うと冬空の青のなかに白い小さな花が点々と咲いている、四季桜の数本に。

本堂のそれぞれの仏像に手を合せ、投げ入れた賽の音がいやに大きく響く。

奈良の街の全体の見渡せるベンチに掛け右手に大仏殿を、少し左に五重の塔、カメラをパンするように街全体を見回して行く。

志貴皇子もここ離宮（とつみや）で、ひとときの癒しを求め過したであろう。

鉄塔の立ち並ぶ生駒山の今の山容と脳裏を横切る、万葉時代とが複雑にかけめぐり、現実に戻り白毫寺の石段を下りて行く。

日溜りの風のこない石段に掛け、のみどを通す泡に疲れをいやす。

石段を下り坂道を横切る家並に出た「山の辺の道」の木札が目に入る。ここから春日大社当りまでが山の辺の道の最後らしい。

草枕旅のやどりに誰が夫か国忘れたる家待たなくに
（三－四二六）人麻呂

午前中に見てきた人麻呂塚のことを思いつつ、最後の山の辺の道を、春日大社へ向い歩み始めた。

そして二度能登川の澄んだ流れに出た、底石の見える浅い流れである。この流れが今あえる山の辺の道の、小さな小さな面影とし山の辺の道を完歩できたことで、一つの思いが達成できた。

「氷魚」のことから（137）

岡本八千代

四月十三日、啄木忌が過ぎた。今年は死後百年に当たる。彼は、詩についてこう言っている。

「詩は所詮詩であっては可けない。人間の感情生活の変化の厳密なる報告、正直なる日記でなければならぬ。従って断片的でなければならぬ。」「もう一つ言い残した事がある。それは、我々の要求する詩は、現在の日本に生活し、現在の日本語を用い、現在の日本を了解しているところの日本人に依って歌われた詩でなければならぬということである。」（日本詩人全集8・316頁より）

と、なかなか厳しい言い方である。たしかに啄木の歌は、日本人として、日本的であろう。自分の生活してゆくその過程の中に感情が、ごく自然のように美しく動いている。次から次と心のままに短歌の詩型に表現されてゆくような気がする。それは何故か？

さて、ここから「当世媛鏡」のつづき――。

六。七。八。は（同じ年の夏のこと）

○お清は、女中のあさを連れて浅草の観音参りに来たが俄雨に合いあさとはぐれてしまい、お清は茶屋の軒で雨宿りしていた。小降りになったので仁王門の方へ行こうとした。すると、後から傘さしている一人の男が、仁王門まで一所に傘に入れていってあげるという。

○その人は年頃は十八・九の美少年。地の洋服を着て隠しの上に白い手拭を少し見せ、胴着はわざと着けず紐飾りのシャツを現わした小意気な打扮。

○仁王門で別れる時、お清をいつまでもふりかえって見てくれた青年。お清もその青年の後姿をいつまでも見送っていた。

○そこへ女中のあさが来て、二人はいっしょに家へ帰った。家には叔母（おため）と才吉が何かを話していたところだった。

七。

○川瀬山次郎という商人は、片間の財産を悉く踏み潰したと、おためが嘆いていた。実は、おためは片間の財産を預っていたので、それを山瀬に預けておいたため失敗したのだった。お清にそれを話した。――お清は、「つぐないを心遣い下れば帰って私の苦労、気にとがめないように」と言った。

○ついに、才吉親子と、お清は下女のあさも、老僕八十平にも暇を出し、裏棚近い小さい家に移り住んだ。

八。

○三人の裏長屋住まいは、幅身狭く心細く暮らしてゆかなければならなかった。

○才吉は学校に寄宿させ、おためは雑仕事に、お清は着物などの裁縫の賃仕事。そこへあの川瀬山次郎が一つの話をもって来たのだった。

（以下次回へ）

ことのはスケッチ（402）

今泉由利

『画廊ハウス』

小学生の頃だった。「白だけで絵を描きたい」と母に訴えた。母は「試してごらんなさい、自分の思い道理に」と諭して下さった。

自分がしてみたいことを、どんどん試してみるというが、インプットできたと同時に、「自身の試してみたことは、他人には訳の分らないことだから…」自分の内に仕舞い込む癖がついた。

「油絵を描いてみたい」と言った時は、祖父が油絵道具一式を買って下さった。そして納屋から探しだした一M四方程のベニヤ板に「始祖鳥」のつもりを描いた。まだ始祖鳥の色などわからなかった時代、自分の心の色で。

出来上った絵は誰にも見せず、ずっと自室の本棚の裏に入れておいた。

東京に出てからは、教室に居るより外へ出て「沢山のことを見なさい」「移動には地下鉄に乗らないで、外の景色を見なさい」と言われる先生に教わり、忠実に実行していた。

学生の身でありながら、三越に反物を卸していた手機織りの老舗に、〝丁稚奉公〟をし、トイレ掃除から…何もかも職人さんと一緒に過したこともあった。

「確かな技術のうえにしか成りたたない」という自分の考えを実行していたつもりだった。

その法で、南米の原始などの織り、染…を経験したく、日本の織、染、テキスタイルグッズを山程携えて南米へ出掛けたのだったけれど、原始系は無理だった。アルコール綿が入った缶を持たされて育ってしまったから。

アルゼンチンのハイソサェティは、パーティばかりしていた。パーティドレスに直接染料で絵を描いてしまうことを考えつき、それには絵が描けなくては…せっせとアトリエに通う。

まずドレスを着る人間を把握出来なくてはいけない。

自分＋椅子程の大きな裸婦像に取り組んでしまった。裸でこんなに大きくてはどこにも広げられないまま広げてない。

白い紙に鉛筆だけで描くクロッキーが気に入り、アルゼンチン、ブラジル、スペイン、ロスアンゼルス、ニューヨーク…何十年？と描き続け、どんどん溜まる。「白い絵」とはこのことだったのかもしれない。

そして気付いた。せっかく描き溜めても、災害とかでクシャクシャになってしまうかもしれない。私が死んでしまえば、ブルドーザーがきて終りにするだろう。

生活を一変し、家に居ることを多くした。家の壁という壁、今まで描いてきたものを掲げ…とてもスペースは足らないけれど、しばらく眺め…取りかえたりすれば…。

斯くして「画廊ハウス」。ワインを飲みながら眺めている。そしてまだ懲りない、これから動物クロッキーに取り組んでみよう。相撲クロッキーも興味ある。レディ・ガガさんのライブクロッキーも…試してみたいことがいっぱい。

もし、「見てあげよう」と思われる方がおありでしたら、是非お訪ね下さい。一献をもち歓迎です。

事前に０３－５９２４－２０６５まで連絡なさって下さい。

和菓子街道（68）

http://www.trad-sweets.com/

平　松　温　子

石部宿から草津宿に向かう途中、矢倉という場所を通る。ここには寛政 10 年（1798）建立の道標が立っているが、昔この辺りに、姥が餅を売る茶店があったという。

今も昔と変わらぬ草津名物として知られる姥が餅だが、もとは大阪の陣に向かう徳川家康に、土地の老婆が献上したとか、織田信長に滅ぼされた近江佐々木氏の子孫をこっそり育てていた老婆が売っていたとか、由来には諸説がある。いずれにしても、小さな茶店で売られていた餅菓子が大評判となり、庭園を持つ大きな店を構えるまでに成長した。広重の浮世絵にも、矢倉の道標と大繁盛の姥が餅屋がしっかりと描き込まれている。

江戸時代の絵図を見ると、形の整った腰高の「一盆五十銭 上製」と、形の崩れた「同十五銭 下製」の２種類の姥が餅が描かれている。失敗作は割安というのが、現実的でなんともおもしろい。

姥の乳房に見立てた姥が餅。

◆うばがもちや
住所：滋賀県草津市大路2-13-19
電話：077-566-2580

お知らせ

▽七月号原稿は、六月一日(金)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アララギ誌と共に返送しますので、返送用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A

〒一一四-〇〇二二　今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

△長かった冬、待ちかねた今年の春、そのせいかテレビ画面に桜の映像が、殊の外多かった様に思います。

御津先生は「春になると、みんな桜の歌ばかり作ってくる。もう少し作者自身の桜を歌って欲しい。自分自身の思いを写生せよ、自分を歌え」。そんなお叱りをいただいたものです。

△歌が出来ない、欠詠しようかしら、そんな声を聞きます。私自身もそう思うのです。でも「三河アララギ」誌を開いて自分の歌が載っていない、それはとても淋しく虚しいものです。

又今日から思いついたこと、目にしたことをメモに書き留めて、その中から一首にしていきたいと思っています。　(小野)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一ヵ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千円、一ヵ年分四千円とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十四年五月二十五日印刷　第五十九巻 第六号
平成二十四年六月一日発行　定価 六百円

編集部　岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘
平松 裕子・山口 千恵子
発行人　今泉 由利
発行所　三河アララギ会
三河アララギ発行所　〒四四一-〇三一一
豊川市御津町御馬西三七
TEL (〇五三三)七五-二〇〇九
振替口座　〇〇八三〇-六-五六二二九
URL　E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp
Homepage http://imaizumiyuri.jp/
印刷所　株式会社 桜創美